

令和3年度 学校総合体育大会兼全国高校総体サッカー大会 埼玉県予選 大会総評

報告者：高体連技術委員 南稜高校 横山晃一

新型コロナウイルスの影響で昨年度は中止となった標記大会が6月6日から23日にかけて2大会ぶりに開催された。本大会はプリンスリーグ関東に所属している昌平高校と、関東大会埼玉県予選でベスト8に入ったチームに加え、U18埼玉県リーグ(Sリーグ)に所属しているチームと各支部予選を勝ち上がってきた24校の計49校によるトーナメント方式で実施された。優勝は正智深谷高校、準優勝に武南高校、ベスト4が昌平高校と浦和東高校、ベスト8が立教新座高校・浦和西高校・浦和南高校・西武台高校という結果になった。正智深谷高校は初優勝。8年ぶり3度目の全国大会出場で、8月に開催される全国高校総体への出場権を獲得した。

優勝した正智深谷高校は関東大会県予選では準決勝で西武台に0-4で敗戦を喫して本戦出場を逃している。今大会ではチーム全体の守備力が向上し、2回戦から決勝までの5試合をすべて1-0の完封で勝ち進んだことが特筆すべき点であろう。システム自体は1-4-2-3-1や1-4-4-2など試合状況によって配置が変わるものの、どの試合も80分を通してコンパクトな陣形を保ち、高い技術を誇る昌平高校相手でも容易にプレッシャーをはがされる場面が見られなかった。特にボランチの位置から危険なスペースを把握して何度もボール奪取をしていた2年生ボランチの⑰初雁、空中戦での強さを誇る両CBの④キャプテン森下、⑤小屋、積極的な飛び出しで何度もチームを救ったGK①小櫃の4人の守備面での貢献が光る試合が目立った。正面から跳ね返すだけではなく、相手クロスにおける守備力の高さが目立ち、ほとんどの場面で競り勝っていたのが印象的であった。CK時の守備もゾーンDFの完成度が高く、準決勝・決勝で計14本のCKを与えてるものの、1失点もしていない。いっぽうで、どの試合も接戦ながらしっかりと得点を挙げていたのは、守備から攻撃に移る狙いがチーム内ではっきりと共有されていたからであろう。特に準決勝・決勝における得点シーンはそれが顕著であった。昌平高校戦では、前半こそ自陣でブロックを形成する時間が長かったが、後半からチーム全体の意識を前がかりにして前線からプレスをかけて、相手DFからGKへバックパスをさせる場面が増えた。低い位置でボールを奪うのではなくDFラインにプレッシャーをかけて高い位置で奪ってショートカウンターという狙いがあり、50分に生まれた得点シーンも相手陣地右奥のペナルティエリア付近で奪ってからの電光石火のシュートであり、おそらくチームとして意図していたものであろう。決勝の武南高校戦でも同様にピッチ中央付近で相手アンカーにプレッシャーをかけてボールを奪ってから手数をかけずに狙いすましたロングシュートが決まり、結果的にこれが決勝ゴールとなっている。いずれの場合も相手のほうがボールを保持している時間が長いことを想定しながら、奪ってからのゴールまでのイメージが明確に作られていたからこそその得点であった。

関東大会県予選に続き、今大会でも準優勝となった武南高校は悔しさの残る敗戦だったが、現時点では県内トップレベルの高い攻撃力を示すことができたのではないだろうか。1-4-1-3-2のシステムをベースに、後方からのビルドアップで両SBが幾度となく攻撃参加をして攻撃に厚みを作り出していた。キャプテンの⑤中村は左SBのポジションの枠に囚われない自由なポジション取りとプレーで相手を翻弄し、対照的に右SBの③重信は後方からチャンスを窺ってタイミングよくサイドライン際を駆け上がってチャンスメイクを試み続けた。準決勝の浦和東戦での2得点目は正にこの形が結実したも

のであった。昨年からすでに主力として活躍していたFW⑭水野は、2年次は両SHを主戦場としていたが関東大会ではOH、今大会ではFWと徐々にポジションを前にコンバートしている。労を惜しまぬ豊富な運動量で守備面での貢献が抜群なうえに、大事なところでしっかりボールを引き出して決定機をつくるなど、この先が楽しみな選手の1人である。もう一人の2年生FW⑩櫻井は小柄ながらもフィジカル負けをしない強さと、ゴール前に飛び込んでいくオフザボールの動きが魅力的な選手である。準決勝の浦和東戦では見事な動き出して3点目のクロスに合わせたものの、まだ好不調の波が目立つようであり、今後は10番を背負うストライカーとして安定した結果が出せるようになってほしい。優勝した正智深谷高校とは対照的に4試合で15得点と攻撃が爆発したが、毎試合の失点もあり計4失点している。今後は選手権に向けたチーム作りとしてこの攻撃力をさらに研ぎ澄ますのか、守備を構築していくのか注目したいところである。

優勝候補筆頭に挙げられた昌平高校は、準決勝で前述した正智深谷高校の堅固な守備を崩しきることができずにベスト4となった。イメージとしても定着しつつある1-4-2-3-1のシステムで、昨年度から出場している右SB②本間と、今季左SBにポジションをコンバートしたキャプテンの⑨篠田大によって攻撃に厚みが増えるのが特徴である。また選手層も厚く、GKとDFライン4人以外は試合によってメンバーもポジションも流動的となっていて戦力が落ちない点が今季の昌平高校の強みとなっている。フィジカル面でも強化が進んでいる様子が窺え、選手権ではさらに他チームの脅威となりそうだ。プリンスリーグ関東では第6節までで17得点7失点で2位(暫定)につけるなど、全国区のチームをも圧倒する攻撃力をもつが、今大会では準々決勝で立教新座高校と延長戦までもつれ込み、正智深谷高校とは0-1で敗戦したことから、今後も県予選会では徹底した分析を受けて相手が守備網を固めてくることが予想される。それだけにリベンジを期す選手権ではその点を攻略するためにどのような変貌を遂げていくのが楽しみなチームである。

今大会唯一の公立高としてベスト4入りした浦和東高校は、関東大会県予選では初戦で姿を消してから、今大会へ向けて短期間のうちに見事にチームを立て直してみせた。チーム全体での守備意識が高く、ヘディングの競り合いやボールへの集結、球際でのバトル、素早いボールの奪い返しなど基本的な部分が徹底されていた点の特徴であった。特に関東大会本戦を優勝した西武台高校を破った準々決勝での一戦では、技術で上回る相手に対して80分間球際で戦い続けた末に逆転勝利を収めたもので、非常に見応えがあった。

代表権を獲得した正智深谷高校は8月14日から福井県で開催される全国高校総体に出場する。堅守が光った県予選であったが、全国を相手にどこまで通用するのかが見ものである。また、攻撃面でも県予選を終えてからの2か月弱の間にどのようなエッセンスを加えていくのかも注視したい。本戦でも埼玉代表の正智深谷高校が躍動することを期待しつつ結びとしたい。